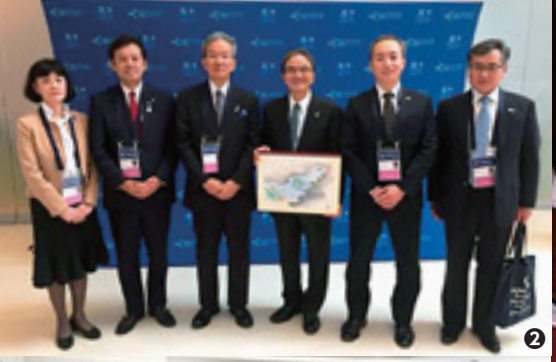
# むなかた

文月（ふみづき）　第689号

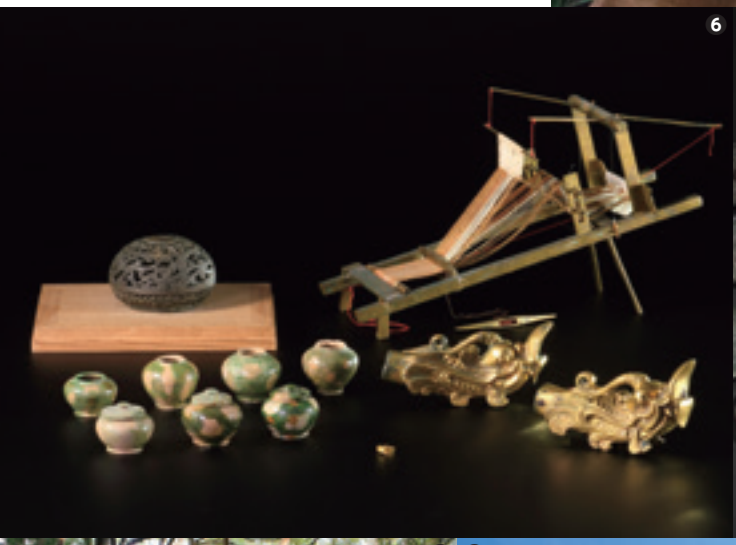
目次

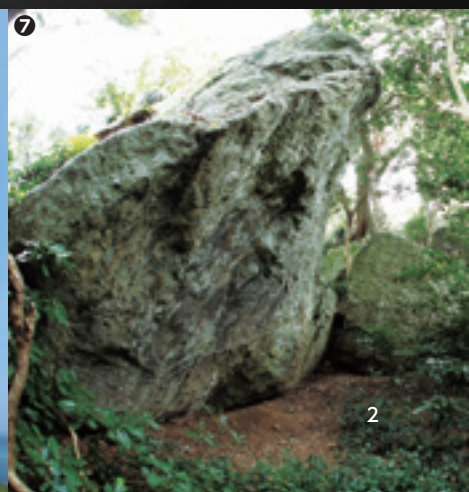

世界遺産登録一周年　3・2
九州北部豪雨から一年　4
沖ノ島祭祀　5
神宝館だより・造営日記　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7


よって！　九州本土からおよそ十キロの宗像大島。宗像三女神の次女神を祀る中津宮へ赴任し、間もなく三カ月となる▼県内最大の島である大島は、往時二千人を超えていた人口も現在は六六〇人、実にその半数が六十五歳以上という高齢化が進んでいる▼産業の中心である漁業は、水産資源と漁獲高の減少、食文化の欧米化などによる魚価格の下落など、若者の多くが島を離れて暮らしているのが実状である▼島の学校は凡そ一学年四～五人、この春より県内二番目の小中一貫校となり、一～九年生まで四十六名の児童が学んでいる▼そんな島が昨年世界文化遺産に登録された。フェリーが着くたびに全国各地から多くの観光客が押し寄せ島は活気づいた。間もなく一年が経とうとしているが、島内氏子の胸中はまだ掴みきれていない▼但し、島民が意識しない日々の暮らしや、島民一人ゝの人生に神が寄り添っているなど、これまで目にしたことのない「神」との距離感には日々驚いている▼神主は島では「先生」と呼ばれる。まだ何も分かっていない「今度の先生」も島では一応先生である。　（塚）



❶昨年の、第41回世界遺産委員会（ポーランド・ＩＣＥクラクフ・今グレンスセンター）審議の様子❷登録後の文化庁長官をはじめとする地元関係者❸❹平成29年7月9日、海の道むなかた館審議中継、登録瞬間。❺❻沖ノ島出土の御神宝。島から出土した8万点の奉献品は国宝に指定され、辺津宮の神宝館に収蔵展示されている。❼沖ノ島・磐座❽沖津宮遙拝所❾辺津宮境内・高宮祭場





# 世界遺産登録一周年記念
# 特別展「沖ノ島国宝×藤原新也写真展」を神宝館にて開催

『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群が世界文化遺産に登録され、まもなく一年が経つ。

昨年の七月九日、ポーランド・クラクフでの世界遺産委員会審議の中継を見守る中、約四〇〇人の市民等が歓喜に沸き、涙を流す姿は今も忘れられない。十年以上の歳月を費やし、多くの人々の努力により、漸くたどり着いた世界文化遺産登録。

この一年で当社は国内外より、様々な要請が増えてきた。日本固有の歴史・文化・伝統を伝えることはもちろんのこと、海を隔てて成立するが故に海の環境問題についても警鐘をならしてきた。

登録より一年となる今夏、当社神宝館において沖ノ島出土の国宝と写真家・藤原新也氏の写真を同時に展示する特別展を開催する。

沖ノ島の神秘性、先人たちがこの島に対して抱いてきた畏怖畏敬の念。これを感じることができる特別展となる。

この特別展をはじめ、様々な事業を展開予定である。一周年という区切りの年に何ができるのか。また何を発信することができるのか。神社・宗像大社としての社会的役割はどこにあるのか、現在、十年後、五十年後、一〇〇年後の「宗像」のためにするべきことは何なのか。

不易流行…まさに真価が問われている。

**世界文化遺産登録一周年記念事業**

七月十六日(月)
福岡県世界遺産シンポジウム
エルガーラホール・大丸パサージュ広場

七月二十一日(土)～十一月三十日(金)
沖ノ島国宝×藤原新也写真展
宗像大社神宝館

八月二十四日(金)～二十六日(日)
第五回宗像国際環境会議
宗像ロイヤルホテル他

九月十七日(月)
世界遺産劇場　市川海老蔵奉納歌舞伎
宗像大社辺津宮

十月二十九日(月)
豊饒祭
宗像大社辺津宮

十一月一日(木)～二十二(木)
西日本菊花大会
宗像大社辺津宮

倒壊した神社跡

現状住むことが出来ない地域へ
復興への願いを込めて県内外より贈られた鯉幟

# 九州北部豪雨から一年
# 改めて自然に対する畏敬を

昨年七月の九州北部豪雨より一年が経過する。被災地域に対しては各ボランティア団体の支援活動や、行政による復旧工事で一定の復興は進んでいる。

神社界では、「先ずは氏子地域の各ご家庭が日常を取り戻してから」という現地の意向から、今年五月初旬に被災神社の現地調査を行なった。

同行した当社職員の報告によれば、特に被害の大きかった朝倉市・郡の杷木地区と東峰村の山際では復旧工事の関係車輌ばかりが行き交う状況で、山には地滑り跡や今後の降雨対策のブルーシートや大型土嚢が多く目に付き、未だ痛々しい災害の痕跡が多く残っていた。社殿自体には被害は無いものの、近隣の被災が酷く住民が未だ自宅に戻れていないお社が殆どであり、中には集落自体が流され、神社の鎮座地が確認できないお社も有り、今後の村祭りの存在を心配する現地の声も聞かれた。

この豪雨の原因となった線状降水帯の局所的な停滞に対する研究成果等が報じられ、その要因の一つに温暖化が関係しているともいわれる。温暖化をはじめ、近年の自然災害の多発や自然環境の変化は、我々が経済や生活の向上を優先させ続けた事に起因するのは間違いないであろう。

元来、神道は自然崇拝にも通じており、当社の沖津宮の古代祭祀や高宮祭場の祭祀形態にみられるように、自然や又はそれがもたらす災いの鎮めに対して祈りが捧げられてきた面がある。自然に神が宿るという信仰、その神々に対する畏敬・畏怖の念を今こそ見直すべき時が来ているのではないだろうか。

被災地域とそこに住む方々の生活環境・精神両面の一日も早い復興を祈るばかりである。

# 沖ノ島祭祀 7

## ―華麗なる捧げ物（2）
## 玉纏御太刀の原形―

國學院大學　神道文化学部教授　笹生 衛

宗像・沖ノ島祭祀遺跡の岩陰に残された七号遺跡からは、複数の鉄製の刀剣が出土しているが、これらとともに特徴的な遺物が出土した。一つは捩った鉄の棒をU字形に曲げ、表面に銀を被せた金具だ。大きさは幅六センチ、高さ三センチほどで、「捩り環頭」と呼ばれもので、刀剣の柄の先端に装着した。もう一つは、水晶製の玉である。長さ三～四センチ、幅一・五センチ程度、三つの山を作る。この形の玉が奈良県の三輪山で出土したので、一般に「三輪玉」と呼ばれている。三輪玉は、柄をにぎる手を保護するため、刀剣の柄に付けた「勾皮」に十個ほど糸で縫い付けられていたと考えられる。勾皮を付けた刀剣の柄は、ちょうど西洋のサーベルのような形となる。柄の先端に銀色に輝く捩り環頭をつけ、柄には透明な水晶の玉を贅沢にあしらった、独特な形をした刀剣である。これは「倭系飾り大刀」と呼ばれ、古墳時代、伝統的で格式の高い大刀として扱われた。七号遺跡には、このような刀剣が、複数、納められていたのである。

倭系飾り大刀の姿は、古墳に立て並べられた埴輪にも表現されており、神とともに、古墳に葬られた特別な先祖にも捧げられるべきものと考えられていたようだ。そのような刀剣の代表例が、奈良県の藤ノ木古墳（六世紀後半）の石棺内から出土した飾り大刀である。金を被せた捩り環頭、三輪玉は銅に金メッキした金銅製。柄は全体に銀で覆い、鞘は金銅製の板で飾り小さなガラス玉をちりばめる。全体が金・銀に輝く、華麗な倭系飾り大刀だ。この大刀には、二匹の魚をかたどった金銅製の飾り「魚佩」が付いていた。

藤ノ木古墳の倭系飾り大刀の系譜は、伊勢神宮の御神宝「玉纏御太刀」「須加利御太刀」へとつながっていく。この他、七号遺跡では、組紐と綾で飾った色鮮やかな胡籙（矢の入れ物）、盾の中央に取り付けた鉄板、矛が出土している。これら胡籙・盾・矛も、玉纏大刀ともに御神宝として、現在まで続く神宮の御遷宮で新調され、神宮の中心、御正殿の中に納められている。宗像・沖ノ島七号遺跡から出土した武器・武具は、伊勢神宮の御神宝の直接の原形を示しているのである。

また同時に、神宮の御神宝につうじる品々が納められていた七号遺跡、その巨岩の周辺は、神宮の正殿と同様、極めて神聖な場所であることも示しているのである。

捩り環頭

三輪玉

# 神宝館だより 15
## 八万点ノ国宝収蔵

宗像大社三宮での祭祀成立を解明する上で重要とされる遺跡と祭祀品を紹介してきたが、このうち、大島御嶽山遺跡での古代祭祀は七世紀末までさかのぼり八～九世紀を主体としたことが判明している。室町時代末成立の「大島第二宮年中御神事次第」には、同遺跡が、現在、御嶽山東麓に鎮座する中津宮の「上宮」（奥宮）として当時存在し、祭祀を展開していた様子を記す。本遺跡は中津宮の起源と考えてよい。また、下高宮一帯の採集品には、八～九世紀の沖ノ島一号遺跡や大島御嶽山遺跡と共通する滑石製品（舟形など）もある。これらは、宗像三女神への祭祀が沖ノ島、大島、本土の海浜部（下高宮か）の三か所で営まれたという『日本書紀』『古事記』の天照大神と素戔嗚尊との誓約の場面の記述をまさに示すもので、三宮での祭祀の構成は遅くとも記紀が編纂された七世紀後半には成立していたといえる。

近年、下高宮周辺や中津宮境内からの採集品（社外品含む）と沖ノ島出土品を比較検討し、三宮での祭祀が五世紀あるいは国家祭祀前の四世紀までさかのぼることも想定されている。本稿で紹介した上殿出土の土師器、第三宮址出土の鏡や滑石製ミニチュア短甲などは未公開資料であったが、三宮での祭祀行為が四世紀までさかのぼり、その後八～九世紀まで継続した可能性をさらに高める品々であるため、今後一層重要となってくるだろう。（福）

『日本書紀』神代巻

# 時満ちて道ひらく 造営日記 42
## 沖津宮社殿保存修理工事

五月二十六日から社殿屋根の銅版葺き工事が始まった。神職の勤務交代に併せて木工事と屋根工事の職人が交代して工事が進められており、九月の完了を目指す。

## 第683回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

玄関に並み立つ十本見上げ立つヒトツバタゴの白花ゆらぐも　山本　静子

ヒトツバタゴはナンジャモンジャともいう高木で花が美しい。それが十本、壮観だっただろう。

食べ残す朝餉にラップ切る母の手際に負ける十七の春　早川　祥三

面白い素材だが手際よくラップを扱う母に負けたのは誰かが分かるような工夫を。

親友が嵯峨野のごとく竹林を整頓してをり汗まみれにて　佐々木和彦

竹林を保つ友の努力。〈竹林を嵯峨野のごとく保つわが友は汗して〜〉〜には手入れの具体を。

八十路越え目と耳と歯を治療するヘレンケラーの苦悩を偲ぶ　秋吉　嘉範

目、耳、歯は年を取るとどうしても弱るもの。結句〈苦を偲びつつ〉としては。

今世紀〈アラブの春〉が始まったチュニジア国をまた地図に見る　山﨑　公俊

2010年にチュニジアのジャスミン革命に始まった民主化運動に注目していた作者だろう。

いくつもの部屋に物満つわがくらしながく施設に母は一部屋　北野カズミ

物が多すぎる暮しへの懸念か。二句〈〜満つる〉四句以下〈施設の母は一部屋なれど〉。

皐月風吹く庭内に青梅は実を競い合いて日増しに太る　森　龍子

豊かに実る梅の実。二句以下〈吹くわが庭に競いつつ日ごと太れり青梅の実は〉とした。

夫よりたくましきとう和太鼓の腕が束ねる一家九人　吉﨑美沙子

女性和太鼓奏者の腕が印象的。初句の夫が、作者の夫でなければ〈夫君〉としたい。

新幹線の車窓に見ゆる低層のビルは市外にぽつんと立てる老人施設　萩原　勉

老人施設の寂しさを悲しむ作者。二〜四句〈車窓を過ぎし二階建ては街から遠き〉などと。

水色の空にドレスの裾広げ福智の山は初夏に憩う　本田エリナ

擬人化された福智山の景が涼し気。二句〈空のした〉結句〈初夏を憩えり〉。

### ◆選者詠

梅雨の午後妣のブローチを付けて出るすこし気の張る用はたすべく

幾代も種とりて蒔く朝顔が紅もありしにみな紺に咲く

## 第654回　俳句

飛花落花空の深さをはかりかね　早川　祥三

### 御造営奉賛者御芳名

（平成三十年五月）
（順不同・敬称略）

五〇、〇〇〇円
桜井市　村島　和徳
三〇、〇〇〇円
横浜市　神谷　光信
一〇、〇〇〇円
北九州市　末永　真
中央区　桑原　博巳
練馬区　星　直妙・朋希
東かがわ市　赤坂　丈未
横浜市　辻　明秀・淑子
横浜市　土田　甲三
八、〇〇〇円
横浜市　辻　明秀・淑子
六、〇〇〇円
福岡市　山本　純也
五、〇〇〇円
我孫子市　清水　克明
いなべ市　林　泰弘
大阪市　徐　昊辰
金沢市　藤田戦略研究会
川崎市　飯島　康
北杜市　澤田　伸史
熊本市　吉永　彰一
郡山市　宗像　利文
札幌市　TAGIRIMUSE entertainment
狭山市　五十子仁朗
白井市　眞﨑　恵介
杉並区　大越　光恵
仙台市　小野寺祐子
泉南市　辻　正則
秩父市　山谷　宏子
豊中市　三宅真由子
名古屋市　村上　美佐
練馬区　徐　暁昌
日田市　橋本　哲男
宮崎市　畑中美智子
二、〇〇〇円
生駒市　豊﨑　倫臣
石巻市　本田　智章
犬山市　河田　康雄
大分市　河野　京子
大野城市　高山美智子
糟屋郡　岡山　恭典
北九州市　熊野多美子
北九州市　祐恒　順子
北九州市　三浦　哲也
国立市　山口　和男
熊本市　太田　勇
古賀市　寺田　千春
札幌市　鈴木　智恵
世田谷区　弓岡　徹矢
瀬戸内市　岡﨑　光子
函館市　野々原知恵
浜松市　松﨑　晋也
広島市　渡辺　宏志
箕面市　（有）アースビルド
武蔵村山市　真島　信行
大和市　森地　研
四日市　児玉　広和

むなかた 文月（ふづき） 第689号

## 7月 まつりごよみ

| | |
|---|---|
| 1日 | 総社月次祭　午前11時<br>引続き　高宮祭、第二宮・第三宮祭<br>宗像護国神社祭 |
| 15日 | 総社月次祭　午前11時<br>引続き　高宮祭、第二宮・第三宮祭 |
| 27日 | 第63回中津宮七夕揮毫会　午前9時<br>於：大島・中津宮 |
| 31日 | 大祓式　午後5時<br>於：神門前<br>引続き　夏越祭<br>於：本殿 |

宗像大社

## 編集後記

宗像大社周辺地域の田んぼには、水が張られ田植えが始まった▼植えられた苗は秋に、稲穂になり、やがて米が収穫される▼先日、稲に関してこんな話を知った▼「稲妻」の語源は稲穂が雷に感光することで実る、稲の妻という意味からきているということである。科学的にも、雷が発生することで窒素固定という植物にとってプラスの要素が発生するというので、単純な当て字ではないことがわかる▼地震雷火事親父…恐れられるものも象徴である雷。雷が多い年は豊作という故事があるように恐ろしい雷ではあるが恵をもたらす一面があり、感謝しなければならない。（黒）

2018年7月1日発行（月刊）／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話（0940）62―1311（代）　http://www.munakata-taisha.or.jp/